

警察労働運動の推進者 渡辺千古 弾劾

日刊 動労千葉

83. 10. 29

No. 1480

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五六（公衆）〇四七二二七二〇七

「6・12デモ」あげ告訴「事件」で「ファシストの居直りと泣き顔」『実践と理論』に反動的雑文

革マル弁護士、渡辺千古は、動労東京地本の学習雑誌「実践と理論」に「6・12津田沼事件の審判決を振り返って」なる雑文を寄せている。われわれは、この革マル理論をむきだしにした超反動的的文章を徹底的に弾劾するとともに完膚なきまでに粉碎しつくすものである。

権力との一体化に告訴路線を吹聴

この文章の反動性は、第一に「6・12」のデモチ上げ性をおおいかくし、「6・12は動労千葉の暴力路線がその原因」など、事実を一八〇度ネジ曲げたデマとペテンに満ち満ちていること。

第二に、告訴による成果（!?）吹聴し、告訴路線の活用を叫びたてていること。

第三に、告訴路線に権力との一体化を反労働者のイデオロギーで意義付け、正当化していることである。

そうしたうえで、この文章の最大の狙いこそ、今日の動労の反動路線すなわち動労千葉や国労に対する告訴・タレコミ路線、権力・当局と闘ってはならないという屈服路線、闘う動労千葉・国労解体路線に組合員を引きずりこむことを目指しているものであると言える。

われわれは、こんなことを絶対に許すわけにはいかない。

動労「本部」革マル追放・一掃、動労大改革、そして国鉄決戦勝利のためにも、これを徹底的に批判し、さらなる闘いのバネとしなければならぬ。

事実を百八十度逆転したデマとペテン

①は、「暴力路線の行きついた先の6・12事件」なる言い方をもって、あたかも動労千葉が暴力を路線化しており、それが原因で事件がおきたかのように述べていることである。

曰く、「千葉動労を結成した中野書記長を中心としたグループは組合員を脅迫と恫喝でつなぎとめてきた」「動労にとどまろうとする組合員を集団で殴る蹴るなどの暴力を繰り返してきた」と言うのである。まったくあきれはてるばかりである。動労革マル分子の暴力支配・組合民主主義の無視が動労千葉の分離独立の一因であったことは衆知の事実であり、4・17を始めとする動労革マルの数々の暴力もまた誰一人知らないものはないのである。ウソをつくならもつとまじなウソをつ

くべきである。

②は、「官許の暴力」と、動労千葉の暴力が権力・当局の承認のうえのものであると述べていることである。

4・17津田沼襲撃が、まさに機動隊の見ているまゝで行われたこと、襲撃後、武器を手に機動隊のまゝを意気揚々と引きあげる姿は、ブル新にすらのつた明らかな事実である。古くは72年の千葉気動車区襲撃で機動隊に「関東青年部ガンバレ」と声援されたことはあまりにも有名である。

81年4・15の春闘スト襲撃の後、当局に嚴重処分を文章で要請したことも衆知の事実である。この間の組織争闘戦の過程での当局からの処分者がまったく一方的に動労千葉側であったことと考え合わせても、権力・当局と一体となっていたのが動労「本部」革マルであることは明々白々である。

③に、「6・12事件の発端は「動労千葉が当時、組織的に危機にあった」・「仙台からの多数の動労組合員が各職場に配置されることに危機感をつのらせた」結果といっていることである。

6・12当時と言えば、同年4・15春闘襲撃を粉碎し、負け犬動労革マルの当局への処分要請攻撃をものはねのけ、ますます団結をかためていた時期であり、基本的には組織争闘戦の決着が明らかになっていった段階であった。また、仙台からの帰任者も、そのほとんどが事前に動労千葉・国労への加入の意志表示をしていたのであり、どちらが危機感をつのらせていたかは一目瞭然であった。

渡辺は、こうした具体的事実には一言も触れられないのである。

渡辺は、こうしたデマとペテンのうえで、告訴によつて「千葉動労の暴力は一掃された」とドンキホーテよろしく結論し、従つて、告訴路線こそ動労の利益を守るためと活用せよと主張するのである。こういうやり方をファシストのやり方と言うのである。

（次号へつづく）